

戸川幸夫

togawa yukio

猛犬
忠犬
ただの犬

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



猛犬 忠犬 ただの犬

常州大学図書館
tojo daigaku
戸川幸夫
蔵書章

講談社



文芸文庫

もうけん ちゅうけん
猛犬 忠犬 ただの犬 いぬ

とがわゆきお
戸川幸夫

二〇一三年一月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Lee Kumi 2013, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



ISBN978-4-06-290184-0

目次

猛犬 忠犬 ただの犬

五

解説

平岩弓枝 三三七

年譜

中村伸二 三五一

猛犬 忠犬 ただの犬

togawa yukio
戸川幸夫

講談社  文芸文庫

目次

猛犬 忠犬 ただの犬

五

解説

平岩弓枝 三三七

年譜

中村伸二 三五一

猛犬 忠犬 ただの犬

昭和八年の晩秋――。

そのころ僕は旧制山形高等学校の生徒であつた。

一年半の学寮生活を終えて、市の東北郊を流れている馬見ヶ崎川まみさきの河原に近いしもたやに下宿していた。

その辺りは当時、埋立地区と呼ばれた新開地であつた。河原の荒蕪地や田圃を埋め立てて町づくりがなされたからであらう。

道路は広く、並木は整然としていて、家々も新しかったが、まだどことなく、しつくりとした町らしさがなく、人気ひとけのない部屋のようながらんとした空虚な感じがただよっていた。それは家数が少なく、家々の周辺には果樹園や畑地が多く、風通しがよいということが原因しているようであつた。

しかし、山形市内では一等地の住宅街に、いずれはなるだろうと思えた。

そのころここに建ち並んだ家々の多くは、高等学校の生徒たちに部屋を貸していたが、

僕が世話になった遠藤家もそうした家の一軒だった。

御主人の定治^{さだじ}さんは以前は警察官で、天童や楯岡^{たておか}の署長をしたことのある人だったが、

僕が下宿したころは市内にある日本赤十字山形支部に勤めていた。

遠藤家の周囲も畑地と果樹園になっていて、二階の僕の部屋から手を伸ばせば届きそうなどところに真つ赤な林檎がよく稔っていた。

家の前の大通りを越えて十メートルも行けば河原になっていた。水量が少なくて小川のような貧弱な川が、川に比べるとずっと広大な石河原の中を曲がりくねっていて、河岸には葉の落ちた雑木林が続き、遠くには薄墨で描いたような杉木立^{がま}が在った。そしてその木立を越えたはるか向こうに利鎌^{とがま}の刃のような鋭い稜線を見せて雁戸嶺^{がんとれい}が浮かんでいて、雨のあとともなれば、その尾根に陽が当たっていぶし銀のように輝くのだった。雪がきたからなのだ。美しいが、寂寥とした風景であった。

僕が下宿していた部屋は表の大通りに面した六畳で、そこからは前の家の瓦屋根を超えて盃山が望まれた。

左斜め前に遣水商店という雑貨商があつて、そこに眼つきはややきついが小股の切れ上がった娘さんがいた。そこで高校生がよく煙草を買いに通っていた。毎晩のように十時ごろになると、悲しげにチャルメラを吹き鳴らして、中華ソバ（その頃は支那ソバと呼んでいた）屋の屋台車がやってきて遣水商店の前で店開きをした。

前の年に落第して、しかもその年の成績もわるく、このままでゆけば放校になるかもしれないという不安さと、友人たちから置いてけぼりにされたような淋しさと人恋しさから、学期試験のころになると腹がへつてもへらなくても、僕は部屋を出て屋台車のところへ行った。その中華ソバ屋は安ちゃんという僕と同じ年ごろの若者で、鍛冶町の方からきているのだと言っていた。安ちゃんがソバを作っていると腹をへらした友人たちが集まってきた。僕がいた辺りは環境がよいので、殆ど軒なみといっていいほどに山高生が下宿をしていたから、方々の家からぞろぞろと出てきてソバを食べた。ほんの二、三十分ほどの短い息ぬきだが、それがとても楽しい時間のように思えた。

安ちゃんがチャルメラの尾を曳いて町の方へ去ってゆき、みんなも居なくなると僕はよく独りで河原に出た。雁戸おろしが吹きすさぶ夜でも、小雪のちらつき出した夜でも僕は出た。

河原のずっと下手しもての方に千歳橋という橋がかかっていて、それよりも更にもう一つ向こうに奥羽本線の鉄橋があった。この時刻になると夜汽車がながながと汽笛を鳴らして鉄橋を渡った。昼間は聞こえないのだけでも、夜になると四辺が静かになるので鉄橋を渡る汽車の車輪の響きや、機関の喘ぎまでが手にとるようにわかった。

汽車ながく ひびき残して

すぎゆけり

悲しき声を 聞けるものかな

さびしさに河原に出でて

四つ 五つ

小石ひろいて 夜の壁に投ぐ

そのころこんな歌をつくった。もつとたくさん何十首となく作って、巻紙に書き連ねて鴨居に貼っておいたら下宿の小母さんが僕が厭世的になったのではないかと誤解して、「戸川さんだら、なしてこだな悲しい歌ばかりつくるんだハ？ 馬鹿なことすんな、なッ」

と言った。自殺でもするのではないかと心配したらしい。あとの歌は、どんなものだったかもう忘れてしまつて、右の二つだけしか憶えていないが、人の好い、親切な小母さんに余計な心配をかけたものだった。

夜汽車の汽笛には、僕は胸が痛くなるような郷愁を覚える。それは若いころから、頭髪が白くなつてしまつた今日までも一貫して変わらない。それというのも、僕は幼少の頃を、汽車が行き交う北九州の八幡市で過ごしたからであろう。

八幡市は今日では北九州市八幡区となり、近代的大都市に成長しているが、大正の初めごろは、既に独立した市ではあったが製鉄所によって辛うじてもっているような市街で、年中、煤煙のためにごみごみしていた。低く、うす汚れのした町並みがずうつと続いていた。

製鉄所に材料を運びこんだり、製品を運び出すために何本もの引込線が入りこんでいて、小さな機関車が貨車を引っぱってガタゴトと往来し、昼となく夜となく、ヒステリックにピイピイと汽笛を吹き鳴らしていた。

これとは別に、本格的な長崎本線、鹿児島本線の列車が、通過した。この方は汽笛も本格的で、力づくよくゴーツ……と長鳴きをした。

小雪のちらつくような晩、炬燵で温められた蒲団にもぐり込むと姐やねえ（お手伝いの娘さん）が、グリムやアンデルセンの童話を一つ読んでくれた。それがおきまりであって、読み終わると、

「さあ、寝んしゃいね」

と蒲団の上からポンポンと叩く。そのまま眠るときの方が多かったが、時には眠れなくて、もう一つ、もう一つとせがんだ。

「駄目よウ、そんなに二つも読んだらじき終わって、来月までもたんよ」

と姐やと言う。月に一冊の童話の本を、父が東京から月極めで送らせていた。それほど

に読書に不便な時代、土地柄だった。

眠れない枕もとに長崎本線か、鹿児島本線を走る夜汽車の汽笛がゴーツと聞こえてくる。すると急にさびしくなつて、涙をぼろぼろこぼしたりした。甘ったれ屋だったんだらう。

すると姐やは、僕の涙を見て、びっくりして、

「じゃあ、もう一つだけ読んであげるけんね。一つだけよ」

そして本の頁をめくる。天井からは、電球の先にとんがりのある、電燈がついていた。もう一篇が読み終わるころ、またも夜汽車が長鳴きをして通る。こんどのは、前のとは反対方向に走る汽車だ。

そんな想い出がいまも鮮やかに浮かぶ。ものごころつく頃に沁みこんだ記憶が夜汽車の汽笛を聞きたびに郷愁をかきたてるのだろう。

僕は山形高校生のころ林芙美子さんの「放浪記」を熟読した。なかでも最初の、

——私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習つた事があつた。

更けゆく秋の夜 旅の空の

侘しき思ひに 一人なやむ

恋ひしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であつた。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になつたと云ふので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関と云ふ処であつた。私が生れたのはその下関の町である。

——故郷に入れられなかつた両親を持つ私は、したがつて旅が古里であつた。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋ひしや古里の歌を、随分侘しい気持ちで習つたものであつた。——（原文のまま）

という書き出しの部分が好きだつた。またこんなところがある。

——それは丁度、直方の炭坑町に住んでゐた私の十二の時であつたらう。「ふうちやんにも何か売らせませうたいなあ……」——（原文のまま）

遊ばせて置いてはもつたいたない年頃というので学校を止めさせられ、行商をするようになつて九州一円を転々としたあげくに、炭鉦の町直方のうらぶれた木賃宿に落ちつく。そこで彼女は遠賀川沿いの白い道を毎日扇子だのアンパンだのを売って歩いた。そうしてゐるうちに、